

[演題7]

リハビリテーションを施行した透析患者の 移動・排泄動作自立度別の自宅復帰率 —非透析患者との比較より—

○中西信敬¹⁾ 大谷公人¹⁾ 辻岡大輔¹⁾ 北川奈々¹⁾ 村田喜寛¹⁾ 林 誠二¹⁾ 村尾 浩²⁾

1) 清恵会三宝病院リハビリテーション科

2) 神戸学院大学総合リハビリテーション学部

Key Words：透析患者，機能的自立度評価（FIM），自宅復帰率

1. はじめに

透析患者は、非透析患者に比較して水分制限や食事制限等の医学的管理が必要であり、自宅への退院に難渋するケースが多いとされている。他に自宅復帰を困難にする要因として、移動能力低下や排泄動作自立度の低さ、介護力不足等がある。そこで透析患者においても移動能力、排泄動作能力が自宅復帰率に関与しているか調査を行なったので報告する。

2. 対象と方法

2009.4.1～2011.3.31に当院医療療養型病床でリハビリテーション（以下、リハ）を処方され、2011.3.31までにリハを終了した患者のうち、死亡および急性期病院転院、転帰先不明症例を除外した501名を対象とした。内訳は透析患者117名（以下、A群）、非透析患者384名（以下、B群）であった。機能的自立度評価表（Functional Independence Measure）の移動項目「6」「7」の自立群232名（A群：59名、B群：172名）、「5」以下の介助群270名（A群：58名、B群212名）、排便項目「6」「7」の自立群282名（A群：65名、B群：217名）、「5」以下の介助群219名（A群：52名、B群：167名）に分け、転帰先（自宅or自宅以外）をA群とB群間

で比較した。統計学的解析は χ^2 検定を用いた。

3. 結果

移動動作自立群においては、A群で自宅復帰31名（53%）、自宅以外28名（47%）、B群で自宅復帰87名（51%）、自宅以外85名（49%）（ $p=0.79$ ）。介助群においては、A群で自宅復帰25名（43%）、自宅以外33名（57%）、B群で自宅復帰95名（45%）、自宅以外117名（55%）（ $p=0.81$ ）。排便動作自立群においては、A群で自宅復帰33名（51%）、自宅以外32名（49%）、B群で自宅復帰109名（50%）、自宅以外108名（50%）（ $p=0.94$ ）。介助群においては、A群で自宅復帰23名（44%）、自宅以外29名（56%）、B群で自宅復帰73名（44%）、自宅以外94名（56%）（ $p=0.94$ ）であった。

4. 考察

医療療養型病床においては、リハを施行した透析患者と非透析患者の自宅復帰率の差はなく、移動動作能力、排泄動作能力は自宅退院を阻害している要因とは言えなかった。日常よく遭遇する透析患者が自宅復帰困難と感じるのは、透析患者は非透析患者と比較して病態が不安定であり、急性期病院への転院や死亡退院が多いためかもしれない。今後も継続的な調査が必要と考える。